

## 保健室経営

# コミュニケーションツールとしての保健便りに関する考察

## —保健指導・保健便りに関する保護者アンケートの結果から—

雨宮 恵子

### 1 はじめに

本稿は保健指導・保健便りに関する保護者アンケートの結果を基にコミュニケーションツールとしての保健便りのあり方を考察することを目的とする。

筆者は平成 24 年度より子どもたちの成長に関心を寄せ、それを支える家庭とのつながりと教職員の協働を視点に、中長期的な見通しのある実践を通して、保健室の「経営(マネジメント)」のあり方について研究をしてきている。その中で家庭向けの保健便りは家庭と保健室、あるいは家庭同士の双方向性のあるコミュニケーションツールとして捉え、その具体的なあり方を探ってきた。

筆者が構想する保健室の経営において中核をなすものは指導的機能をもつ保健指導である。言うまでもなく保健便りは、子どもの成長を支えるものでなくてはならない。そのため保健便りは保健指導とリンクさせ、家庭と共に子どもたちを成長に導くために「家庭が主体となりそれぞれの状況に応じた実践を継続」できるものを目指している。平成 25 年 1 月に実施した生活習慣実態調査において「年度当初に比べ保護者の意識や家庭での生活に変化」が「ある」とした家庭は 64%であったことから、コミュニケーションツールとしての保健便りが多くの家庭において「それぞれの状況に応じた実践を継続」するための「頼り」となりつつあると考えられた。

それぞれの状況に応じた実践を継続する家庭がさらに増え、子どもの健康づくりに関する保護者全体の意識が高まっていくには、保健便りや保健指導が幼稚園内の「保護者同士の話題」、つまり

保護者同士のコミュニケーションのきっかけとなるかどうかの一つの鍵だと考える。しかし平成 24 年 11 月に実施した保健指導・保健便りに関するアンケートにおいて「保健指導・保健便りをきっかけに保護者同士の話題になったことがある」と答えた家庭の割合は 28%と低い結果であった。

そこで本稿では、平成 25 年 12 月に実施した保健指導・保健便りに関する保護者アンケートの結果を基に平成 25 年度の実践を振り返ることを通して、「保護者同士の話題」に着目しながら、家庭に「頼り」にされるコミュニケーションツールとしての保健便りのあり方を考察する。

### 2 保健便りの基本的な考え方<sup>1)</sup>

#### (1) コミュニケーションツールとしての保健便り

ここでいう「コミュニケーション」とは、単に情報を伝達することではない。家庭と保健室とが双方向に互いの声や思いを受け止め、その思いに応え、返していく営みを繰り返すこと、言いかえれば家庭と保健室との「響き合い」と捉える。

保健便りを通して保健室の取り組みや養護教諭の思い、子どもたちの健康課題等を発信することは必要である。しかし保健室が家庭に対し、情報を一方向に発信することに疑問を抱かないままであれば、いわゆる「押し付け」となってしまうのではなかろうか。家庭にとって「やらされる」ことでは継続しないだろう。保健室が保護者の声を受け止め、保健室あるいは教職員集団が取り組んだことや今後取り組むこと、子どもたちの成長の様子や家庭からの声、家庭で考えてもらいたいこと等を保健便りを通して家庭に返していけば、家

庭は保健室を「頼り」にしながら子どもの健康や成長を主体となって考え、各家庭の状況に応じた取り組みを継続していくのではないだろうか。また、丁寧に保護者からの声を受け止め、返していく営みを繰り返していくことで、家庭から実践したことや子どもの様子が保健室に届けられるようになるのではないだろうか。

平成24年9月以降、家庭での実践の様子が保健室に届くようになった。保護者と互いの実践や子どもたちの様子を共有し合うことは、筆者にとって家庭の思いや苦勞を知るよき機会であり、保健室の取り組みに対する家庭の理解に感謝する機会でもある。そして何より保護者と共に学び合い、高まり合っていることを心から実感できる活動でもある。

このような家庭と保健室、あるいは家庭同士の「響き合い」を通して、取り組むべき次なる課題は明らかになっていき、保健便りの内容もおのずと形づくられている。これらのことから保健便りは家庭との「響き合い」の結果であると考える。

(図1)

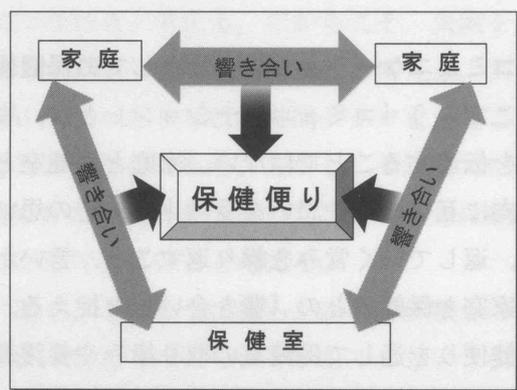


図1 コミュニケーションツールとしての保健便り

## (2) 平成25年度保健便りの目標

平成25年度は、保健指導や保健便りを「保護者同士の話題」にするための活動を重視しながら、家庭での実践において「頼り」になる保健便りをめざす。

保健便りの内容として重視するのは、平成24年度に引き続き保健指導のねらい・内容、子ども

たちの成長の様子、保護者の声・家庭での実践例である。また、保健指導後タイムリーに、継続して発信する。継続とは、継続して取り組んでいることをそれに合わせて発信することであり、子どもたちの成長の様子を継続して発信することでもある。そうすることで保健指導の取り組みが親子の会話につながり、また保健便りを家族で共有してもらうことで、家族の話題から生活の見直しや実践につながっていくと考える。平成24年11月の保護者アンケートでは「保健便り・保健指導の内容について親子で会話をするか」は93%、「保健便りや保健指導は家庭での取り組みの参考になるか」は85%と高い結果となっている。

保健便りをきっかけに「保護者同士の話題」となるには、保護者同士のつながりを活かすことが重要と考える。保護者同士のつながりを上手く活かすことができれば、保健室からの情報はより多くの保護者に届いていくと予想する。また保護者は他の家庭の実践を直接聞くことで、気持ちを揺さぶられ、実践してみようとする意欲を高めていくのではないだろうか。このように保護者同士の話題となっていけば、それぞれの状況に応じた実践を継続する家庭がさらに増え、子どもの健康づくりに関する本園保護者全体の意識が高まっていくのではないかと考える。

保護者同士の話題とするために重要と考える活動は、保護者の関心の高いテーマをつかむための活動である。具体的には保護者対象アンケートの実施、保護者の声を直接聴くことの二つである。また、日常的に教職員と交流し合うことで保護者の思いや関心を共有し合った取り組みとして行かねばならないと考える。さらに、掲示物、降園時に行う保護者全体へのアナウンス等、様々なコミュニケーションツールを活用していくことで保護者同士の話題につなげていきたい。

## 3 実践

### (1) 経過の概要

本園は年度が替わるごとに全体の5分の2の家

庭が入れ替わることが予想される。特に4歳児は進級児と新入児との混成クラスとなるので、次年度いかに取り組みを積み上げていくかという点で不安があった。平成25年度入園説明会では、会場に一年間の保健便りを掲示し、保健指導の取り組みを紹介すると共に「家庭から寄せられた実践をぜひ参考にしてほしい」と参加者に呼びかけ、平成25年度を迎えた。

「保健指導の年間のねらいを教えて欲しい」という保護者の声が1件、平成24年度中に届いていた。家庭が主体となって取り組みを継続していくには年間のねらいや指導項目は重要な情報である。にもかかわらず家庭に届けていなかった。この反省を踏まえ、5月に発行した保健便りで、年間の保健指導・保健便りのねらいを家庭に届けると共に、各家庭の実践や要望を保健室に届けてほしいと呼びかけた。

また新たな取り組みとして、保健便りに掲載する家庭からの声にはプライバシーに配慮しながら可能な範囲で名前のイニシャルを記載するようにし、家庭が保健便りを共に作り上げている実感をもてるようにした。

保健指導は平成24年度に引き続き歯と口の健康づくりを中心に展開することで子どもたちの中で学びが積み上がることをねらった。また、歯と口の健康づくりを通して、自分のからだを大事にしていこうとする子どもたちの意欲と行動力とを育みたいと考えた。4月に5歳児の保護者から「子どもが歯ブラシのどこを使ってみがくとか意識するようになった」という声が寄せられた。幼稚園でも鏡を見ながら歯ブラシの毛先が歯面に当たるよう自分なりに工夫する子どもたちの姿が見られた。さらに、歯みがきの後、歯面を指でこすり「きゅっきゅ」と鳴るかどうかが試したりしながら、子どもたち同士できれいにみがけた気もちよさを味わっていた。4歳児では、新入児が進級児の様子を真似ながら養護教諭に仕上げみがきを求める姿が見られた。

表1に平成25年度4月から12月までの保健指導・保健便りの経過を示す。

表1 平成25年度保健指導・保健便りの経過

	行事	保健指導	保健便り	保護者アンケート
4月	定期健康診断			
5月	定期健康診断	元気パワー いただき (食)	保健指導年間のねらい	
6月		ゆらゆら 歯みがき	ゆらゆら歯みがき	生活習慣 調査Ⅰ
7月		うんこダスマン	・アンケート結果特集 ①(我が家のお昼寝) ・うんこダスマン ・アンケート結果特集 ②(我が家のいつもの時刻におはよう)	
8月				
9月	保育参加	朝ごはんいただき	・朝ごはんいただき ・親子歯みがき(保育参加の様子から)	
10月	第2回歯科健診 歯科講話	かむかむ (噛む)	・歯科講話の報告 ・我が家のおねしょ克服の術募集 ・かむかむ	
11月		あんぜん よーし	・我が家のおねしょ克服の術特集 ・かむかむ弁当特集 ・あんぜんよーし	
12月	食育講話	かぜ追っ払い	・上手な重ね着 ・私のかぜ予防(教職員編)①② ・アンケート結果特集 ①(我が家にとっておき保健便り活用法)	保健指導・ 保健便りに 関する アンケート

## (2) 経営ロジック

中長期的に子どもたちの将来像を見定めながら成長を「ねがい」、今の子どもたちの姿から導き出した明確な「ねらい」をもって取り組みを積み上げていくために平成24年度に引き続きロジック・モデルを活用する<sup>2)3)</sup>。

平成25年1月に実施した生活習慣調査で「年度当初に比べ保護者の意識や家庭での生活に変化」が「ある」とした家庭は64%であったことから、それぞれの状況に応じた取り組みを実践する家庭が増えていると考えられた。そこで平成25年度は「課題『家庭とのつながり』」において「家庭から養護教諭に取り組みが提案されるようになる」を中期成果指標に加えた。(資料1)

資料1 平成25年度経営ロジック・モデル

<広島大学附属三原学校園教育理念> 自ら伸びよ	
目 標	<保健室経営目標> 子どもを育ていくパートナーである家庭、教職員と共に高まり合える保健室経営 <ミッション> 子どもの自己肯定感を高め、自分のからだを大事にしていることとする意欲と行動力を育む <ビジョン> ① 保健指導を通して楽しみながら実践できる子ども ② 楽しみながら子どもの健康づくりに取り組む教職員集団 ③ それぞれの状況に応じて子どもの健康づくりに取り組む家庭
課 題	家庭とのつながり 教職員の協働
活 動	(1) 日常的なコミュニケーション (2) 保健便り作成 (3) 掲示物作成 (4) 生活リズム・歯みがきに関する保護者アンケート実施(年2回)
投 入	(1) 担任との連携 (2) 指導のねらいや指導方法などに関する職員研修 (3) 歯・口の健康づくりを中心とした集団指導 (4) 昼食と歯みがきの時間を利用した個別の指導と実態把握 (5) 成果と課題の分析に関する職員研修
投 入	(1) 担任との連携の時間(1日10分) (2) 準備と集まる時間 (3) ①教材研究と準備に要する時間 ②クラス毎の指導にかかる時間 (4) 個別の指導等にかかる時間 (5) 集まる時間(10分×2回)
想 定 結 果	1 子どもの実態と担任のニーズが把握できる 2 保健指導の実施(15分×5クラス×年9回) 3 個別の指導と実態把握(日50分×週2クラス) 4 担任による日常の指導が可能になる 5 成果と課題を全教職員で共有できる
短 期 成 果	1 子どもの実態と担任のニーズが把握できる 2 保健指導の実施(15分×5クラス×年9回) 3 個別の指導と実態把握(日50分×週2クラス) 4 担任による日常の指導が可能になる 5 成果と課題を全教職員で共有できる
中 期 成 果	1 子どもの自己肯定感が高まり、自分のからだを大事にするための様々な行動を意欲的にする子どもが増える 2 担任が子どもの実態や家庭・教職員のニーズに基づいた保健指導や保健便りの発行が可能となる 3 家庭・教職員から取り組みの要望や具体的な実践方法について質問が寄せられるようになる 4 家庭・教職員から義理教諭に問い合わせられるようになる 5 取り組みの積み上げにより指導の質が高まる

(3) 保健指導・保健便りに関する保護者アンケート

表2 質問5(集計結果)

質問1 保健便りを毎号読むか。
質問2 保健便りや保健指導の内容について親子で会話をするか。
質問3 保健便りや保健指導の内容について幼稚園の他の保護者同士の話題になるか。
質問4 保健便りや保健指導は家庭での健康管理や子育ての参考になるか。
質問5 今年度一番印象に残った保健便り(自由記述)
質問6 我が家のおき保健便り活用法(自由記述)
質問7 保健便りを読まない理由 ※該当者のみ
質問8 意見・要望(自由記述)

内容	件数
かむかむ弁当	22
おねしょ克服の術	11
歯ぴかっ!おやつ	11
上手な重ね着	9
歯みがき	9
我が家の実践・我が子の写真	4
うんこダスマン	4

対象:全園児家庭 112家庭  
 回収:95家庭 回収率:84.8%

質問5の結果は表2の通りである。

人気の高かった保健便りは、家庭での実践例や具体的な写真や図を中心としたものであった。質問4においても「具体的な実践の仕方がわかってよい」といった意見が54件、「他の家庭の実践はやってみようと思う」といった意見が32件寄せられた。

以下、質問5の結果を基に平成25年度の実践を振り返る。

アンケートは上の8項目で構成した。家庭のニーズと保健室の取り組みに対する反応を把握するための質問5、保健便りが家庭の中でどう活かされているかを把握するための質問6を新たに設けた。

#### (4) かむかむ弁当特集

10月は「噛む」ことをテーマに保健指導を実施した。教材にはスルメを選んだ。“かむかむ実験”と称し、子どもたちが100回スルメを噛むことを通して、硬いスルメがドロドロになっていく様子や顎が疲れる感触を体験できるようにした。保健指導後には指導の様子と噛みごたえのあるお勧めおやつを保健便りで紹介していった。おやつは平成24年度から教材にしており、家庭の関心も高い。しかし今回は日々の食事の中で噛みごたえのあるものを意識してもらいたいと考えた。

筆者は弁当と歯みがきの時間はクラスに入り、子どもたちと共に過ごしている。子どもたちの弁当には幼児期に必要な「かじる」「噛みきる」ことのできる食材が少ないことが気になっていた。

また、冷凍食品が中心と思われる弁当も少なくないと感じていた。

弁当の日は週に4日ある。そのため弁当は保護者の関心は高いと予想した。子どもたちの弁当には、栄養のバランスだけでなく野菜の切り方や食材選びなど毎回工夫されているものがある。雑誌や専門誌で紹介されているお弁当ではなく、他の家庭の普段のお弁当を紹介することで、日々の生活の中で無理せずにできそうな、子どもによく噛んで食べさせるための“ちょっとした工夫”が、それぞれの家庭で参考になるのではないかと考えた。そこで子どもたちの弁当の中から“ちょっとした工夫”があるものを選び、その写真にコメントをつけ、保健便りで紹介していった。(資料2)

#### 資料2 保健だよりかむかむ弁当特集

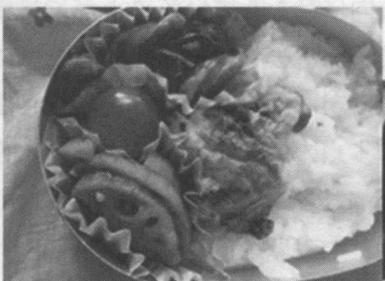
# しんこきゅう

広島大学附属三原幼稚園  
ぼんたんだより NO. 16  
平成25年 11月6日  
発行所 両宮風子



### “かむかむ”の街 かむかむ弁当特集

すべての子どもたちのお弁当から、「よくかんで食べてほしいな」とお茶の方が願って作られていることを感じています。今回は、特に噛みごたえのあるお弁当の中から、いくつかを紹介させていただきます。



“ブロッコリー”や“キャベツ”も、ちょっと固めに切ると噛みごたえアップ



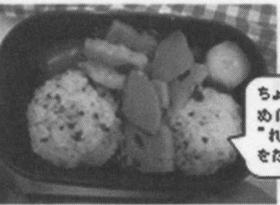
ご飯の上にしらすをちらして、噛みごたえとカルシウム共々アップ



お肉もなかなか噛みごたえあり！



“ちくわ”の中に“きゅうり”の組み合わせもなかなか噛みごたえあり！！



ちょっと大きめに切った“れんこん”をたっぷりと

アンケートには、「栄養の事ばかり考えていたが、硬いもので歯を強くするのもよいと思った」「毎日のことで慣れが出てきていたのでハッとさせられた」「同じ材料でも大きめに切ればいいんですね」等の意見があった。また「かむかむ弁当特集」発行後、子どもたちの弁当にレンコンがよく入るようになり、教職員間でも話題になった。これらのことから本実践は保護者の関心やニーズをうまく捉えた、家庭の実践に直結するものであったと考えられる。

また保護者同士の話題の内容に「弁当」という回答が7件あったことから、保護者同士の話題にもあがったことがうかがえる。

#### (5) 上手な重ね着特集

11月の末、他の教職員から「肌着のシャツを着ていない園児がいるので気になっている」という話を聞いた。また前年の冬は厚着をしている園児が多かったのもそのことも課題だという話にもなった。そこでイラストを用いて冬の服の選び方を示すと共に、子どもたちが寒さに負けず園庭に寝転がった

り、砂場で裸足になって遊んだりしている写真を紹介することで、子どもたちが活動しやすく、また意欲をもって脱ぎ着ができるような服装を家庭で考えてもらいたいと特集した。

担任や副担任は日常的に園児と共に生活しているため、その時の園児の様子を細かく把握している。アンケートに「どうしたら動きやすく寒くなく着せられるか考え始めた頃だったので助かった」という自由記述があった。また保護者同士の話題にも「子どもの服装」という回答が4件あった。これらのことから、担任や副担任の気づきを受け取り、共通の課題として取り組んでいったことで、家庭が必要としている時に必要な情報を届けることができたのではないかと考える。

「上手な重ね着」は保健指導の内容ではない。養護教諭が集団の保健指導として実施できるテーマ数は限られる現状から、保健指導とリンクした保健便りばかりでは保護者の思いに添えていくことはできない。本実践は保護者の関心ごとにタイムリーに添えていったことで、保健便りが家庭の「頼り」となったと考える。

#### (6) おねしょ克服の術特集

6月に実施した生活習慣アンケートで、年中組進級児の保護者Aさんから「夜のおむつが取れず心配している。克服体験談や工夫の仕方があれば保健便りで特集をお願いしたい」と要望があった。これまで保護者の声に応える取り組みを続けてきた結果、「おねしょ」というデリケートな問題にも保健室や保健便りを頼りにしてもらえるようになったと受け取った。

Aさんと直接話をして様子をうかがい、今後の取り組みを相談した結果、保健便りで家庭での体験談を募集し、その後特集していくこととなった。この取り組みを通して、Aさんだけでなく同じ悩みをもつ多くの家庭が、我が子にとっての克服の術を考えていく機会となれば、と考えた。

今回の取り組みでは、家庭から自主的な情報提供は一件もなかった。保護者の関心が低いテーマなのかと心配もしたが、こちらから保護者の輪の

中に入り話題にしていくことで「家では…」 「それから…」 と会話が弾み、たくさんの情報を得ることができた。また、全く困っていない家庭もあったことから、それぞれの家庭で工夫はされているが保護者にとっては自主的に話しにくく、また個人差が大きいテーマであると感じた。そのため今回のアンケートで反響が大きかったことは意外であった。

「うちの子だけじゃないんだと安心し、対策が載っていたので実行しました」「おねしょ対策は人にはききにくいですが、特集を読んで気持ちも楽になりました」「当時の我が子を懐かしく思い出しました」等、6件の感想が寄せられている。Aさんという一つの声を大事にしてよかったと考える。

「我が家の“おねしょ克服の術”特集」を発行した翌日、Aさんからお礼と共に、「親が苦勞しないといけないということがわかりました」という言葉が届いた。今回のアンケート結果を受け、筆者もAさんにお礼と保健便りの反響とを直接伝えることができた。このように保健便りを介して、直接保護者と双方向に話をしていくことが、「頼り」にされるコミュニケーションツールとしての保健便りの大事な営みであると実感する。Aさんのおかげで筆者も多くの保護者と学びを共有し合えた取り組みとなった。

#### 4 考察

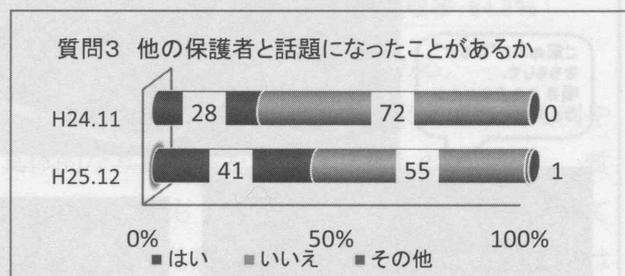


図2 質問3 (結果の比較)

表3 質問3(自由記述の集計)

話の内容(自由記述より)	件数
歯みがき	8
感染症情報	7
弁当・調理法	7
おやつ	5
生活リズム	4
服装	4

アンケートの結果、質問3は平成24年11月より「はい」が13%増加した。保健便りの中で家庭の実践を紹介し、意図的な家庭同士のコミュニケーションを積み重ねてきたことで、保護者同士の実際のコミュニケーションにつながったのではないかと考えられる。また自由記述に「他のお母さんもじっくり読まれているようです」「歯並びの事はみんな心配しているようです」とあったことから、話のきっかけは直接保健便りや保健指導ではないが、子どもの健康問題について保護者同士で話題になっていると推測できる。

また4歳児において平成25年度新入家庭と平成24年度在園家庭別の「はい」の割合を比較すると、新入家庭：40%、在園家庭：56%となり、在園家庭が16%高い結果となった。学年別の「はい」の割合では、5歳児：46%、4歳児：51%、3歳児：17%となり、3歳児が極端に低い結果となった。話題にならない理由には「保護者間の交流がない」「ゆっくり話をする時間がない」がそれぞれ8件で、保護者間の関係の希薄さと日々の忙しさがうかがわれる。

「保護者同士の話題」に着目した実践の振り返りとアンケートの結果から、家庭に「頼り」にされるコミュニケーションツールとしての保健便りは、次の三つの観点を重視した実践であると考えられる。

一つ目は「Catch」である。多くの家庭に共通する身近な関心ごとをキャッチし、それに応える取り組みをしていくことが重要と考える。そのために、子どもたちの姿から見取ること、保護者の声を聴き、その思いに心を寄せながら見取ること、そして教職員集団の一員として他の教職員の声を聴き、互いを見取りを共有していくことが重要で

あると考える。

「上手な重ね着」の実践では、担任や副担任の気づきから共通の課題として取り組んでいったことで、保護者の関心の高い時期を逃さずに情報を家庭に届けることができた。また「かむかむ弁当」の実践では、子どもたちと過ごす中で課題をキャッチし、保護者の弁当作りに対する苦勞に思いを寄せたことで、保護者の関心ごとにより迫ることができている。質問3において「弁当」が保護者同士の話題になったとする7件の内1件は、「はい」の割合が低い3歳児の家庭からの回答である。これらのことから、今後も保護者に共通する身近な関心ごとをキャッチし、タイムリーに取り組んでいけば、保健便りが保護者同士の話題につながり、家庭が実践するための「頼り」となっていくのではないかと考える。

二つ目は「Action」による響き合いである。保健便りの発行前後には、保健室から保護者の話題につなげるアクションが必要であると考えられる。

「おねしょ克服の術」では保護者から主体的に情報が寄せられることはなかったし、アンケート結果からも保護者同士の話題になっていないことがわかる。しかし、こちらから保護者の輪の中に入り話題を提供すれば保護者同士でそれぞれの実践や経験が話し合われていた。また「降園時にお知らせがあると話題になる」「保健指導の掲示がある時に話になった」という自由記述からも、保健室から積極的に話題を提供し、保護者同士の共通の悩みや経験をつなげるアクションをしていくことの必要性が示されていると考えられる。

さらに、話を聴く、子どもの様子やお礼を伝える等、直接保護者と話をする営みを積み重ねていくことで、「頼り」となる保健室、養護教諭として、個々の保護者の中に位置づいていけるのではないかと考える。

三つ目は「Give&Take」である。コミュニケーションツールとしての保健便りでは、家庭の思いに応え、家庭から寄せられた、活かした実践を紹介することを継続してきた。その結果、保護者から「保健便りで特集してほしい」という要望や「ちょ

うど悩んでいたのが他のお宅の実践が参考になった」といった感想が寄せられるようになった。これらのことから、家庭の「頼り」となるよう、皆で知恵を出し合い、またその知恵に助けられる「Give&Take」の場として保健便りを位置づけていくことが重要であると考える。

「おねしょ」の話題は保護者にとって直接話しにくくはあるが、保健便りに寄せられた知恵に助けられることで、それぞれの家庭の「頼り」となったことがうかがわれる。また「保健便りを基に保健指導の内容について親子で話をしている」「園と家庭との連携ができるので子どもの理解を助けている」「子どもと一緒に学べるのが楽しい」「父親に見てもらおうようにしている」といった自由記述があったことから、保健便りが家庭の中で共有され、子どもの健康づくりの「頼り」となっていることがわかる。さらに筆者自身、保健便りに取り組むことを通して、保護者の声に助けられ、家庭の協力の基に取り組みを積み上げていることを実感すると共に、家庭からの期待も身にしみて感じる。

「Catch」「Action」「Give&Take」は、「響き合い」の要素であるといえよう。今後もこれら三つの観点を重視した実践をしていくことで、子どもの健康づくりが保護者同士の話題となり、それぞれの状況に応じた実践を継続する家庭が一軒、また一軒と増え、根付いていくよう目指していきたい。

## 5 おわりに

本稿では「保護者同士の話題」に着目し、コミュニケーションツールとしての保健便りのあり方を考察してきた。アンケートの結果「保健便りや保健指導の内容について幼稚園の他の保護者同士の話題になるか」において「はい」の割合が平成24年11月より13%増加したものの、3歳児ではわずか17%という結果となった。また「保護者間の交流がない」との記述もあった。

価値観が多様化する社会といわれて久しい。コ

ミュニケーション能力の低下も問題視されている。人と人とがつながりにくい社会になってきていると感じる。交流する時間のなさ、ゆとりのなさもその拍車をかけているだろう。そのことを目の前の保護者の問題として実感する結果となった。

保護者同士のつながりを活かしていけば、それぞれの状況に応じた実践を継続する家庭が増えていくのではないかと、保護者全体の意識が高まっていくのではないかと予想したが、活かせる保護者のつながりもない時代が目の前に迫っているのかもしれない。

人と人とがつながりにくい、交流がないということは、困ったときに頼れる身近な“場”や“人”の存在が限られてくるということだろう。だからこそ「頼り」となる保健便り、保健室のあり方が問われているのであろうし、「頼り」にされる養護教諭となるよう高まっていかなければならないと痛感する。

今後も保健室と家庭、あるいは家庭同士の双方向性のあるコミュニケーションを仕組んでいくと同時に、保護者から直接話を聴く、語り合うといった生のコミュニケーションを通して保護者同士をつなげる役目をしていかなければならない。そして、人とつながること、人に頼り、頼られることの温かさを、保健便りを通して保護者に、そして子どもたちに伝えていきたいと思う。

## <参考文献>

- 1) 雨宮恵子：「子どもの育ちをつなぐ保健室経営ー家庭と響き合う保健便りー」, 全国国立大学附属学校連盟養護教諭部会研究収録, 第48集, 2014.
- 2) 梶田叡一：「教育評価〔第2版補訂2版〕」, pp.61-64, 2010, 有斐閣双書.
- 3) 長尾眞文：「学校評価の理論と実践の課題」, 日本評価学会『日本評価研究』第7巻第1号 pp.8-11, 2007.